



特集

長崎で学ぶ

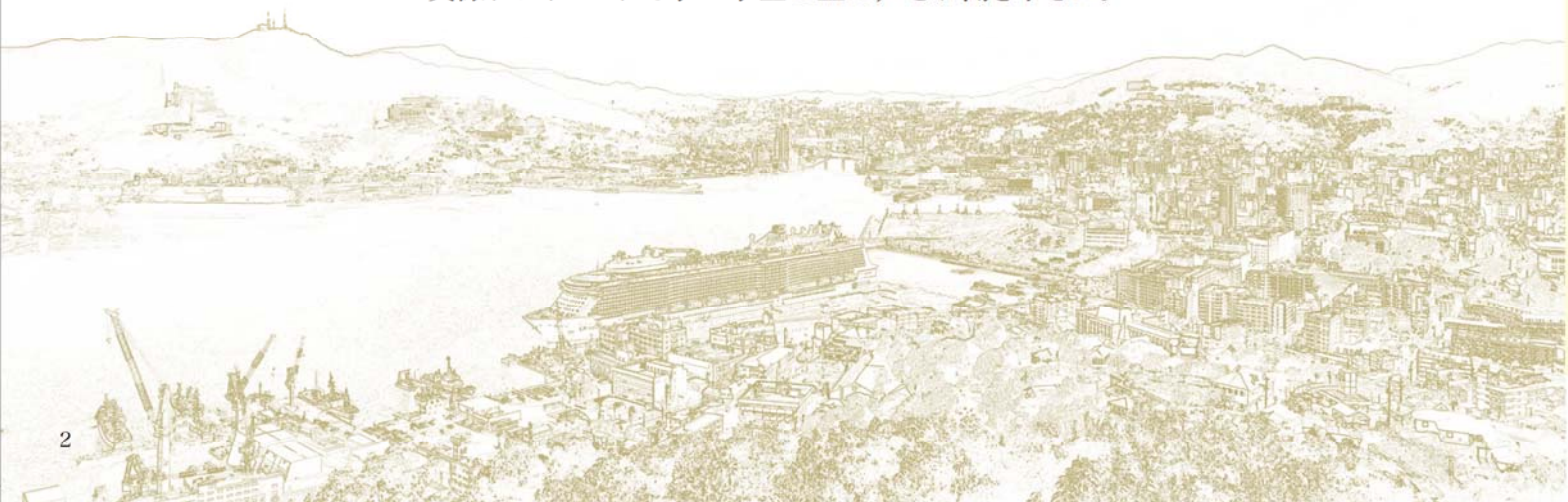
大学生活が充実したものになるかどうかは、
その大学がある街によっても大きく変わります。

長崎大学は、特別な歴史と文化を持った街・長崎にある大学として、
街の魅力を最大限に活用したプログラムをたくさん用意しています。

さまざまな環境で多様な人々と接する経験により身に付く実践力や協調性、積極性は、
国内外、どんな現場でも生きてくる力です。

世界にはばたくために長崎で学ぶ。長崎での学びが世界で生きる。

実際にフィールドで学ぶ学生の生の声をお聞き下さい。



特集
長崎で学ぶ

長崎と長崎大学 連携することで まちが活性化する



Takashi FUJIKI

藤木卓

理事(地域貢献担当)

長崎大学の強みの一つは現場に強いこと
それは座学を基礎に地域での体験や実習を重視しているからです。
さまざまな環境で多様な人々と接する学びにより
国内外での実践力が身に付きます。
学部で、大学全体で、今、多彩なプログラムが行われています。

一九七八年長崎大学教育学部中学校教員養成課程卒業。
二〇〇五年東京工業大学大学院社会理工学研究科人間行動システム博士課程修了(博士(工学))。長崎県内の公立学校教員を経て、一九八九年に長崎大学に専任。二〇〇七年より教育学部教授となり、二〇一七年より現職。専門は教科教育学(技術科教育学)、教育学。

長崎観光の 起爆剤となるか？ 「学生チーム」も始動

長崎大学と地域との関係性について地域貢献担当の藤木卓理事にお話を伺いました。

「近年、国は地方創生について地域の

享受する側と提供する側の双方を体験し、観光ビッグデータなどの活用を学びながら、新しい観光企画を立案・実践するというプロジェクトです」。

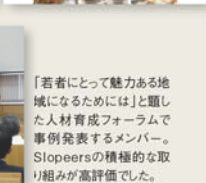
興味深いですね。

「仕掛ける側に回ること、協調性や積極性が身に付きます。プロジェクトが成功すれば起業に結び付くこともあるでしょう。今、長崎に必要とされているのは、街を愛し、誇りに思う気持ち、すなわちシビックプライドです。長崎のために何かやりたい」という地域愛を育むことで、卒業後に長崎に就職する学生もいるだろうし、他県で働きながらUターンを視野に入れる人や、長崎ファンとして息長く支え

1 NPO法人Slopeersで 長崎をもっと面白く!

2016年から始まった学生の自主企画「Slopeers」は、ボランティアではなくビジネスとしてのプロジェクトを数多く運営するNPO法人。広報担当の小浦悠さん(経済学部3年)のお話です。「長崎は長期インターンシップができる場がなく、ならば自分たちで立ち上げようというのが始まりでした。南山手など斜面地で暮らす人々の元に修学旅行生を案内する事業部や、県内就職を考える学生が企業CMを制作するスロナビ事業部、就職前の学生の名刺を作るハツメイシ事業部、学生目録のカフェ紹介サイトを運営するカフェ事業部など、複数のプロジェクトが動いています。アルバイトとは違うビジネススキルを身に付けられると経済学部の学生30人が関わっています。

左はスロナビ事業部の企業CM制作会議。下はカフェ紹介サイト。



「若者にとって魅力ある地域になるためには」と題した人材育成フォーラムで事例発表するメンバー。Slopeersの積極的な取り組みが高評価でした。

2 長崎大学独自の 地方創生活動支援金制度

長崎で学び、将来長崎のために役立ちたいという人にニュースです。長崎県内の企業への就職活動、ボランティア活動およびインターンシップなどの活動を支援する「地方創生活動支援金」(月額2万円)制度が、平成30年度の3年生より開始されました。地方創生人材学士プログラムを受講し、長崎県内の企業へ就職するなど、地方創生に貢献することができる学生を支援する制度で、すでに40名の学生が活用しています。

地方創生推進本部 TEL.095-819-2107

<http://www.cocp.nagasaki-u.ac.jp/>

国立大学を核として語ることが多くなり
ました。長崎大学のように、その県に一つしかない国立大学は、地方創生の拠点としての役割を担っているのです。長崎が元気になるためには長崎大学が欠かせないし、長崎の街が活性化しなければいけない。連携することでまちづくりに寄与することに
なるのです」。

ていく人も増えるかもしれません。学生の県内就職に関しても新しい支援制度がスタートしました。

地域と大学の理想的な関係が構築されるのです。一方で、世界はグローバル化が加速しています。

「グローバルとローカルは逆の概念ではありません。例えば、大学時代を長崎で過ごしながら長崎のことを何も学ばないまま卒業する人は、採用する企業側からすれば「視野が狭い」と思われかねません。海外で日本や長崎の魅力を聞かれない「知りません」では国際交流は成り立たず、ローカルな体験こそがグローバルなシーンに生きてくるのです。また、都

お互いに良い影響を与え合うのです。はい。長崎大学は以前から「やってみようでスク」が介在する地域でのボランティア活動が盛んで、自主企画を立ち上げる積極的な学生が多いのです。最近では経済学部の学生主体のNPO法人「Slopeer」による地域プロジェクトが動き出しています。このような長大生の気質を生かして、今年には地域共同型の

市や農村部、離島など地域のさまざまな環境での実習は、将来的に海外で働く際のトレーニングにもなります。そこで、グローバルとローカルのバランスが取れた「グローバル」人材の育成に積極的に取り組んでいます。例えば、教養教育では長崎地域学という地域科目があります。学外から講師を招き、長崎の歴史や文化を学ぶもので、評判がいいですよ。地方メディアの報道関係者や博物館の学芸員、地元出版社の編集長など、講師の顔ぶれが面白いのです。

「ある時の講義は、長崎の世界遺産の知られざる背景について。またある時は「長崎に多い、坂、薬、バカ(祭り好き)」

観光人材育成事業の準備が進んでいます。これは、長崎市などが推進中のDMO(Destination Management Organization)組織の中に大学生チームをつくらうというものです。長崎大学側から長崎国際観光コンベンション協会に提案し、長崎青年会議所とも協議します。詳しくは2月の長崎サミットで発表されますが、要は学生が観光サービス

というテーマ。「なんだこれは」というインパクトが学生の心を捉えます。その講義を聞いて現地に向けば、新たな気付きもあるでしょう。学びを自分の中に落とし込んでいくことができます。各学部のカリキュラムでも離島やへき地での実習や各地でのフィールドワーク、企業の課題解決のための企画立案など、多彩な取り組みがなされています。長崎大学に来れば、わくわくすることがたくさん体験できるし、実社会でも役立つ実践力が自然と身に付くのです」。

では、どのような学びが地域を舞台に展開されているのか、体験した学生たちの声を聞いてみましょう。

◆離島医療・保健実習の実施施設

下五島コース

長崎県五島中央病院
久賀診療所
三井栄診療所
山内診療所
玉之浦診療所
富江薬局
宗留医療センター
伊福貴診療所
聖マリア病院
五島市国保健福祉政策課
五島市長寿介護課
長崎県五島保健所
五島市社会福祉協議会
訪問看護ステーション松浦
訪問看護ステーションくま
横山歯科医院
近藤歯科医院
こまき歯科医院
久賀診療所
岐宿歯科医院
松野調剤薬局三井栄店
只野荘
あおぞら薬局
ニッポン調剤薬局
福江薬局
ゆうとく薬局
あい調剤薬局
社快堂薬局
サポートセンターきらり
井上内科小児科医院
みどりが丘クリニック
伊福貴歯科診療所

対馬コース

対馬コース

対馬いづはら病院
島五診療所
長崎県対馬病院
特養わたづみ
長崎県対馬保健所
地域活動支援センターきらり
対馬市健康づくり推進員センター
対馬市社会福祉協議会

志岐コース

志岐市保健環境部健康保健課
長崎県志岐病院
介護老人保健施設光風
在宅ケア総合支援センター
長崎県志岐保健所
光武内科循環器科病院
三島診療所
原島診療所

上五島

下五島

上五島コース

長崎県上五島病院
有川医療センター
新上五島町社会福祉協議会
新上五島町健康保険課
いるんびつの家
あおた調剤薬局
そごう薬局上五島店
鈴木薬局
ありか調剤薬局
老人保健施設つくしの里

超高齢社会のケーススタディを学ぶ

医学部・歯学部・薬学部 離島医療・保健実習

十四年間の蓄積が 高密度の実習に結実

長崎県は、島の数が日本一多い地域です。五島列島、対馬、そして志岐など。それらを舞台に地域医療・保健の実習を行う医学部、歯学部、薬学部の離島実習は、長崎大学ならではの特徴的なカリキュラムといえます。現地のコーディネートを行うのは、五島中央病院の二画に拠点を構える離島医療研究所。常駐している野中文明助教のお話です。

「この研究所は、医歯薬学総合研究科の離島へき地医療学講座の離島拠点として運営されており、島の検診データをベースにした疫学研究と並行して学生の実習を行っています。医学部と歯学部の学生は全員必修の四泊五日の離島実習があるほか、医学部・薬学部は高次臨床実習（参加型臨床実習）で選択すれば医学部は約1カ月、薬学部は週間の離島実習の機会があります。実習では見学の他、問診をすることもあります。受け入れてくださるのは、地域中核病院やへき地の診療所、歯科医院、薬局、訪問看護ステーションやデイサービスセンター、老人ホーム、行政機関などで、皆さんの協力のおかげで成り立っています。」

「連年の離島実習が始まったのは平成十六年。以来十四年間の積み重ねでつくられた多彩な実習メニューは、全国的に地域医療教育の重要性が叫ばれる今、特に注目を浴びています。」

「もううれしかったです。講話後の測定でも会話が弾んで、私もいつのまにか五島のイントネーションになっていました。」

平井真智子さん（薬学部薬学科六年）は他職種連携が興味深かったそうです。

「医歯薬学の学生同士でも専門用語が通じない場面があって、他職種間連携の難しさや発見も多かったですね。大きな病院の薬局と、島に二軒しかない薬局の薬剤師の役割の違いなども客観的に見られましたし、二人暮らしのお年寄りの家に行く場合に複数の職種で連携して回数を増やすなど、限られた医療資源の活用も考

が、在学中の離島実習の経験は非常に印象深いものでした。「あの時、島で診たおじいちゃんのあの症例」は座学での知識より覚えていたものです。大病院の場合には診断が確定した患者さんについて研修を行います。島では「だるくて熱がある」といった診断が確定していない患者さんの問診から始めるわけですから、これは貴重な勉強となります。また「そろそろ卒はできたね」といった日常会話を交わしながら時間をかけて診察の様子など、二次離島といわれる本上から直接アクセスできない島へも行くそうです。

「はい。そこでは小さなコミュニティで過ごす患者さんの在宅医療に接する機会もあり、医師や看護師、ケアマネージャー、介護福祉士といった各分野の専門家が行うチーム医療の実際も見学できます。近年は、歯学部生が内科の診療を見学したり医学部

生が薬局で見学したりといった他学部の領域での実習も増やし、職種間の役割への理解を深める試みも行っています。」

地域のコミュニティで 必要な連携や 助け合いを学ぶ

実習に参加した山口恵利帆さん（医学部五年）のお話です。

「離島医療は言葉では理解していたつもりですが、実習は初めてのことばかりで勉強になりました。特に船で二次離島に向かう際には、地域を支えるドクターになったような、引き締まった気持ちになりました。地域で脂質異常症についての健康講話も行ったのですが、より分かりやすいよう試行錯誤したかきもあって参加者の方がメモや質問をして熱心に聞いてくださった

宗留島へ向かう船に乗る山口恵利帆さん（医学部5年）。



離島って過疎化が進行しているけれど、その分、地域コミュニティはすごく強いんだと感じました



薬学部薬学科六年 平井真智子さん



五島市の地域の人々を対象にした健康講話を行う山口さん。コレステロールも善玉でキャラクターを変えるなど工夫したそうです。

えさせられました。」

実習の前夜で延泊し、島の方と深く交流をした福井咲穂さん（歯学部五年）のような例もあります。

「五島は大好きで四回目です。実習後にロードバイクで島を周ると言ったら、実習でお世話になった看護師さんが「うちに泊まつていかな」と泊めてくださったことも。以前実習で訪れた施設のおじいちゃん顔を覚えてくれたのもうれしかったですね。二次離島は特に歯科への通院が困難なこともあり、診療も念入りになります。「まだどこか気になる」という患者さんの要望を何度も聞きながら入れ歯の調整をします。コミュニケーションの中で患者さんの生活環境を知ることが大事と先生に指導されたことが心に残っています。」

野中先生は語ります。

「指導員の方々は専門職のプロですが、学生への伝え方に戸惑うこともあります。

そこで、自らの教育力を上げていこうという大学認定の勉強会も行い、質を担保しています。」

この勉強会で報告された学生の感想に、印象的な言葉がありました。

「大きな病院に比べ、一人一人にかける時間の長さを感じた。患者さんの満足度は診察の結果より診察における医療従事者の真摯な態度に左右されることを知った。」

離島医療の強みは住民同士のつながりの強さ。それがこれから日本が迎える高齢社会のキーワードになるのではないかと。

離島実習で学生が経験できることは計り知れません。



介護施設でお年寄りと交流する福井咲穂さん（歯学部5年）。「お年寄りとの接し方は介護経験のある母に教わりました。背後や上から話しかけない、必ず目の高さをそろえてお話しするようにしました。」

「附属学校園で行う教育実習では、主に教科指導をトレーニングしますが、離島へき地実習の場合、学校が地域の中でのように運営され、小規模校の教師の振る舞いはどうあるべきかなど、いわゆるへき地での子ども観・教師像を学ぶことが大きな目的になります。小規模校の場合、地域との交流が盛んな学校も少なくありません。過疎化が進む町は、若い学生が来るだけで元気になる、地域の方も喜んでくださっているようです。また、長崎にはたくさん文化遺産がありますから、そういった伝統的なものと現地で出会うと、歴史を

この実習ならではの特徴とは？

「平成三十年度は、上五島、下五島、平戸市、南島原市の四地区、合計十九の小中学校で五十四名の学生を受け入れていただきました。実習校の選択や日程調整、実習計画の事前打ち合わせなど、学生自らが先方とのやりとりを含めて運営するシステムを取っています。サポート組織として学生会があります。これについても蓄積型体験学習の取り組みの中に含めています。」

事前準備も実習の一部 自主性を磨こう

日まぐるしい社会変化に柔軟に対応するためのインターシブ科目「蓄積型体験学習」。担当の山内正毅教授に、選択制カリキュラムのついでである離島へき地実習についてお話を伺いました。

小規模校ならではの教育方法を体験

教育学部 / 蓄積型体験学習「離島・へき地実習」



お餅を丸めるのって、こんなに難しかったんだ。子どもたちの方が上手だね。



餅つきや竹とんぼ製作など和気あいあい。子どもたちと共に過ごす貴重な体験になりました。



小学校教育コース4年
石橋千尋さん(左)
新田唯さん

南島原市立蒲河小学校で11月16日に行われた収穫祭。保護者や地域の皆さんも参加し、にぎやかな一日。

「子どもたちは先生をたくさん聞きたいです。」「自分の姿を見て子どもたちが良い方向に成長してくれるような尊敬される先生になりたいです。今回の実習では先生方に優しく接していただき、こんな温かい学校で働きたいなと思いました。(新田さん) 履修を希望する学生が年々増加傾向にあるという離島へき地実習。このほか、蓄積型体験学習は、野外体験実習、学習支援実習、企業実習などが含まれています。

「実習中は毎朝子どもたちと一緒にランニングをしました。人数が少ない分、学年問わずみんな仲が良く、思ったことを素直に何でも話してくれました。あつという間の五日間で、子どもたちや先生方に会えなくなると思うと寂しかったです。」

「実習最終日は、保護者や地域の皆さんを交えて収穫祭が行われたそうですね。」「はい。私たちも前日の準備からお手伝いさせていたのですが、保護者の方々が主体となって動かれている姿が印象的でした。当日も保護者の皆さんや地域の方が、たくさん参加されました。」

「実習中は何朝子どもたちと一緒にランニングをしました。人数が少ない分、学年問わずみんな仲が良く、思ったことを素直に何でも話してくれました。あつという間の五日間で、子どもたちや先生方に会えなくなると思うと寂しかったです。」

百聞は一見にしかず、課題解決は現場から始まる

環境科学部 / 環境フィールドスクール



新聞記者になる夢が叶いました。これからも、地域の課題と向き合っていきます！

環境政策コース4年
東蒼晃さん

「環境フィールドスクール」は、水産・環境科学総合研究科に設置されたアジア環境レジリエンス研究センターが実施するプログラムです。平成30年度第6回講座は、「島原半島における着地型ジオツーリズム開発講座②:火山の災害と恵み」と題して、島原半島ジオパーク事務局の協力の下、島原大変の災害遺構を巡るまち歩きを体験しました。

「環境フィールドスクール」は、水産・環境科学総合研究科に設置されたアジア環境レジリエンス研究センターが実施するプログラムです。平成30年度第6回講座は、「島原半島における着地型ジオツーリズム開発講座②:火山の災害と恵み」と題して、島原半島ジオパーク事務局の協力の下、島原大変の災害遺構を巡るまち歩きを体験しました。

「環境フィールドスクール」は、水産・環境科学総合研究科に設置されたアジア環境レジリエンス研究センターが実施するプログラムです。平成30年度第6回講座は、「島原半島における着地型ジオツーリズム開発講座②:火山の災害と恵み」と題して、島原半島ジオパーク事務局の協力の下、島原大変の災害遺構を巡るまち歩きを体験しました。

「環境フィールドスクール」は、水産・環境科学総合研究科に設置されたアジア環境レジリエンス研究センターが実施するプログラムです。平成30年度第6回講座は、「島原半島における着地型ジオツーリズム開発講座②:火山の災害と恵み」と題して、島原半島ジオパーク事務局の協力の下、島原大変の災害遺構を巡るまち歩きを体験しました。

現場実践を通して 理論への理解が深まる

三年次後期の選択科目である漁業練習船「長崎丸」乗船実習Ⅱ。五島市福江港への航海を行い、島内で様々な実習を体験します。亀田和彦教授にお話を伺いました。

「五島市とは二〇一四年より包括連携協定を結んでいます。それ以前から、実習、調査、研究などでお世話になりました。つながりを深めていました。この実習においても、現地の漁業者をはじめ、水産関係の皆さんにご協力いただいています。」

現地ではどのような実習を行いますか？

「例えば、いかで泳いでいる養殖マダコをストレスをかけないように取り上げ、即殺・血抜きした後に冷水槽に入れる。連の作業を見学します。授業で学んだ鮮度変化に関する理論が、高度な熟練を要する現場作業工程に定着していることを目の当たりにして、現場と理論の理解が深まります。水産学部では四年次から研究室に所属します。魚が商品が変わっていくプロセスを見ることで、現場の苦労や課題に気付くことができ、自分自身の研究リンクさせられるものがないか考えるきっかけにもなるのです。」

次の実習では二〇一八年四月に就航した新長崎丸が初めて福江港に入港します。「福江港に停泊中、新長崎丸の一般公開を行います。五島の皆さんにとっては日常生活の一部である海が、実は研究の場でもあるのです。」

プロの仕事に学ぶ水産業の本質

水産学部／長崎丸乗船実習



「五島メ」を実践している漁業者による魚のさばき方指導の様子。「五島メ」とは、高い価格評価を支える即殺処理の呼称。水産学部と長崎県が共同で普及を推進しています。

水産・環境科学総合研究科
博士前期課程1年
平山由布さん(左)
山田実紗子さん



定置網から漁獲物を取り上げる作業を体験。

「福江港市で見学した、魚の競りが印象に残っています。「五島メ」という鮮度保持の方法があるのですが、それが五島メをした魚なのか分らない私たちに、漁業者の皆さんが見分けて教えてくださいました。もう一つは意見交流会です。水産学部の学生に何を求めるかという質問をしたところ「もうかる魚の作り方を教えてほしい」という答えが返ってきました。やはり産業である以上、利益を生まなければ意味がないという現実を再認識しました。」(山田さん)

魚は食料としてだけでなく、肥料・飼料、や化粧品原料などにも使われています。漁業者のみならず魚を扱う事業者の努力なくして良質な商品は生まれません。大学で得た学びをどのように活用し、どのように役立てるのか。五島実習はさまざまな気付きの場でもあります。

研究者と共に学び 未来像を思い描く

長崎学に関連する研究、調査、資料収集の拠点として、二〇一六年に長崎市が開設した長崎学研究所。開設と同時に、大学、博物館、郷土史研究団体、長崎県から成る「長崎学ネットワーク」が組織され、さまざまな取り組みが行われています。組織と大学の関わりについて、長崎学ネットワークで理事を務める木村直樹教授にお話をします。

「長崎には長崎学研究をけん引してきた市民レベルの団体がたくさんあります。しかし、研究という点において、次世代を担う若手が育っているかと言えそうです。ありません。今後、人材育成の面で先細りにならないためには、大学といういわば教育組織そのものが直接的に関わる必要があります。具体的には、研究所主催による研究発表会や、長崎学ネットワークが主催する公開学習会が行われており、二〇一八年一月よりネットワーク内に史料部会を立ち上げて、江戸時代の古文書を読み解く勉強会も始めました。」

学生はどのように関わっていますか？

「定期的な活動としては古文書の勉強会に参加しています。勉強会は毎月一回、長崎市、長崎県、長崎歴史文化博物館の学芸員の皆さんが集まります。若手が多く、彼らから直接話を聞くことは刺激になります。将来は研究者や地方の文化行政に携わりたいと考えている学生にとってロールモデル

長崎学研究を担う次世代の人材育成

多文化社会学部／長崎学ネットワーク「史料部会」

オランダ特別コース4年
山本瑞穂さん

社会動態コース4年
大淵菜音子さん



古文書からひも解く、
外から見た長崎の歴史も
とても興味深くて面白いですよ。



この日の勉強会には学生3名が参加。原本と翻刻を見比べる顕差は真刻そのもの。長崎歴史文化博物館で毎月1回行われている古文書の勉強会では、細川家の書翰を解説、現代的な解釈への置き換えや読み間違いの指摘などディスカッションします。※長崎学＝長崎の歴史や文化に関する学問・研究

ルにもなるのではないのでしょうか。また、ローカルな地域からグローバルな世界との関係を学び、自分たちの社会の立ち位置を強く確認することになります。」

古文書の勉強会に参加している、オランダ特別コース四年の山本瑞穂さんと社会動態コース四年の大淵菜音子さん。外から見た長崎という視点で、長崎と関わりが深い熊本藩細川家の書翰を解説しているそうです。

「当時はメールもなく、紙という媒体に頼っていた時代ですが、紙自体が貴重なものだっただけに、書ける内容は限られています。書簡の中からテンプレートのような言い回しを見つけて、それらを手掛かりに関係性などを読み解いたりもします。難しいですが、学芸員の方は現代語訳にするだけではなく、登場人物や会話の内容まで発表してくださるので、とても勉強になります。」(山本さん)

「例えば、偉い人の名前の前には少し空白を入れるなど、昔の手紙には独特の表現方法があり、上下関係まで見えています。まるで暗号解読みたいなんです。将来も何らかの形で関わりたいと思うほど、古文書が好きになりました。勉強会では、私たち学生が発表や質問をすることもありますが、学芸員さんの前で発表するのはドキドキします。」(大淵さん)

地道に積み重ねられてきた長崎学の研究成果を、今後さらに発展させるためには、二人のような若い人材を巻き込み、育てていくことが大きな力になります。

社会人として活躍する第1歩

長崎大学経済学部、クリーニング業を営むスワンドライ、J.A.ことが共同で、五島産椿油を使用した洗濯洗剤などの開発・販売を行う「五島産椿油プロジェクト」。「学農商工連携」という幅広い分野で力を合わせる体制の中で、ゼミ活動の環として関わる学生たちは商品プロモーションを担っており、企業の現場を体感しながら課題の解決を目指します。経済学部の中西善信准教授のお話です。

「経済学部では、教科書の知識だけではなく実践的なスキルの獲得にも力を入れています。なかでも、県内の企業団体と学生のグループが共同で課題解決を目指す三年生のゼミ活動はその中核を担うものです。食品会社や通信会社からダンススクールまで、企業・団体の規模や職種もさまざま。どのような課題をどう解決すればいいのか、学生たち自身で探すことから始まります」。

実践的なゼミを通して、学生にどのような学びがあるのでしょうか？

「大学で習った理論をきちんと社会で生かすには、自分で調べたり人の話を聞いた方が重要です。ゼミでは、企業の方との打ち合わせやフィールドワークの時間を大切にしています。今後、学生が社会の中で仕事をしていく際に、理論や根拠がなければ人を説得することは

地域資源を生かした新しい価値を作る

経済学部 / 課題解決型学習 (PBL)

関わった商品が店頭で並んでいるのを見ると、なんだか自慢したくなります！

経営と会計コース3年
田浦悠太郎さん



五島産の椿油を配合した「ツバキ」。品質の高さを消費者にどう伝えるかが課題です。

ゼミでの意見交換は、企業の第一線で働く社会人の目線を学ぶ機会となっています。

できません。ゼミで試行錯誤しながら、その必要性に気付いてほしいと思います」。

プロジェクトの中心で大学やJ.A.ことどうとの橋渡し役を担うスワンドライの原竜さんは、学生との協力が商品開発・販売に役立っているといいます。

「自社商品の開発は初めてだったので、各分野とのチームで取り組む「学農商工連携」は強力な後押しとなりました。会議ではアイデアを考えることも多く、毎回楽しく参加させていただきました」。

プロジェクトに参加したゼミの学生にもお話を聞きました。経営と会計コース3年の田浦悠太郎さんです。

「僕たちが取り組んだのは、商品の社会的認知を高めることを目的としたクラウドファンディングのホームページへの掲載です。椿油を使った洗剤の特長や魅力を効果的に伝えられるよう、紹介文や写真、返礼品の内容を考えました」。

会議にはスワンドライの商品開発を担当している原さんが何度も加わったそうですね。

「はい。会議では商品PRに繋がるアイデアを自分たちで考えてご提案させていただきました。できまじなる根拠が乏しくて、理想と現実のギャップを感じました。それでもお話を最後まで聞いてくださり、とても勉強になりました。今後は自分たちで市場調査も行いながら、商品の販売戦略を組み立てたいと思います」。

ものづくりの 実践的アプローチ

工学部ならではの発想と想像力を駆使して、企業や自治体が抱える問題の解決を目指す講義科目「創成プロジェクト」。

「創成プロジェクトは、ものづくりを支える人材の育成を目指し、新潟大学と富山大学との共同で開催される発表大会「学生ものづくりアイデア展」に繋がる講義です。地元企業や自治体から提案された課題に対し、学生が二人から五人ほどのチームに振り分けられます。そして自分たちで試行錯誤した成果を発表する活動報告会が十一月に行われ、今年は上位二チームが新潟大学で開催されるアイデア展に出場します」。

地元企業や自治体からの課題も様々ですが、最終的にどのような成果の形になるのでしょうか。

「調査の結果をまとめたり、システムを作成したり、具体的なモノを作成する場合もありますが、この講義では、成果だけではなくプロセスも重要だと考えています。課題に対するアプローチから完成まで、その過程を「から体験してほしいのです」。

活動報告会は講義室でのプレゼンに加えて、各ブースで成果を紹介するポスターセッションもあるそうです。発表内容も審査の項目なのでしょうか。

「工学部はものを作つて研究成果を示す

成果だけでなく、試行錯誤も重視する学び

工学部 / 創成プロジェクト



プレゼン後のポスターセッションでは模型を使って説明。直接その場で意見を聞く貴重な機会です。

データをもとに実用化できるよう、これからは研究を進めていきたいと思います！

電気電子工学コース1年
橋本龍太さん(右)
原田怜さん(左)

活動報告会のプレゼンでは、従来の防霜ファンと噴流装置を比較して優れている点をアピール。

世界ですが、それを作る目的や社会的な意義を明確に説明できるくらい研究を深めていないと、単なる作業になってしまう。学生にはアイデアを形にするプロセス、そして人に伝える部分まで考えてほしいと思います」。

活動報告会で、二位に輝いたチームの二人にもお話を伺いました。電気電子工学コース2年の橋本龍太さんと原田怜さんです。

「僕たちは東彼杵のお茶の品質や生産性を向上させる新しい技術の開発を目指しました。長崎県農林技術開発センターの茶葉研究室を訪問し、実際に茶畑に足を運んで農家の方の話を聞く中で、霜を防ぐために用いるファンのランニングコストが高いことや、また稼働しているファンの騒音に悩んでいる現状を知りました。そこで僕たちは、防霜のコストと騒音を軽減できるよう、ファンではなくプロアワーで風を送り込んで霜を防ぐ噴流装置を考案しました。ポスターセッションのブースでは模型とドライアイスを使って空気の流れ方を説明しましたが、効果の明確な数値データが必要とアドバイスもいただいたので、「ものづくりアイデア展」ではより正しく伝えられるように準備します」。

自ら課題を設定し、アイデアをきちんと形にして伝えること。創成プロジェクトで学ぶことができるのはものづくりの基本と醍醐味であり、それが研究の大切な土台となります。